

いじめと本



湯浅 慎一
(人間科学部教養教育教授)

担任教師のいじめ

放送室に連れ込まれ「つぎのクラス会で君は発言するな」と担任教師に命令されました。私の発言で審議がひっくりかえるというのです。中二の通信箋には「学級運営に支障を来す」とさえ書かれました。またあるときは何かが書かれているはぎきを手にして「これはきみの投書だろう」と責められました。「筆跡をみたら分かるでしょう」というと、無言で去って行きました。

中学二年のはじめごろまで私は授業には積極的に参加していましたが、だんだんその教師から無視されるようになりました。しかしだれも手を挙げないときなど「湯浅、君はなぜ手を挙げないのだ」となじられました。わたしが発言を控えるようにしていたからです。

ついに「ここには少し成績はいいが、生意気な者がいる」とみんなの前で宣言するほど先鋭化しました。

そんなに僕は悪い少年なのか……

「そんなに僕は悪い少年なのか」と自問して、私はすっかり内省的になり、教師の非難を撥ね返す道を探しはじめました。

私には三人の兄と一人の姉がいて本棚には沢山の本がありました（子供部屋はない）。みどり色の表紙をしたジャン・マルタン著『スコラ哲学入門』なる本が知的好奇心をそそりました。そのカント批判は今考えると間違っただけですが、解ったつもりでぞくぞくしました。教師に対して知的に優越感さえ感じました。

つぎに『偉大なる人間』という高校生か大学生向けの道徳の教科書を取り出して読み始めました。記憶を辿ると、たしか人間としての（動物としてではない）人間は知性と意思をもっており、人間の善さは専ら意思の使用にかかっているとありました。

良心を究明する

意思の正しい使用はどうして解るのだろうか。良心を究明（反省）すると解るとありました。あの教師に何か悪いことをしたのだろうか。悪意をもったのだろうか。勉強のことでときどきぶつかることはありました。教師の自尊心を傷つけて居たのかも知れません。しかしそのようなことのないように徹底的に沈

黙を守ることにしました。教師に対して道徳的にやましいことは何もしていないのでしょうか。私はこうして良心の至高という理念で防御できることを確信しました。

当時のメモに「ぼくはラスコールニコフだ。誰にも理解されない」とありますが、良心主義の私には他人の理解はもうどうでもよくなりました。そんなときトルストイの箴言集を読みましたが非常によく解り、心にしみ込んできました。

『聖書読本、旧約聖書の部』

もう一冊手に取りました。『聖書読本、旧約聖書の部』という子供用の聖書物語でした（原文はラテン語でよく神学生がラテン語学習に使う）。

まずその細密画に魅せられたのかも知れません。ヤーベ神が雲にのって地上を見下ろし、アダムとエワが神を拜んでいる。それまで天文の本は沢山読んでいましたが、死んだ宇宙の話にそれほど心が踊ることはありませんでした。でもこれらの絵と天地創造の話には全身が震えるほど感激しました。

燃える柴の中から神は「我は在りて在るものなり」とモーゼに告げる。存在を己の本質とする存在の意味は大学生になってはじめて「教養教育」で習いました。中学生の信仰はまだ非常に表象的でした（ヘーゲルは宗教は表象だと考えるが本当はずっと意思的なものでしょう）。

雲の上の神秘の国

夕方、学校からの帰り道、丘の上で振り返ると雲の裂け目から黄金の太陽光が束になって上川盆地を照らしました。ああ、雲の上には神秘の国があるのだ。そこにはロケットではなく信仰によって行けるのだ。ヤーベ神の話は道徳よりずっと具体的、全人的で私の心を確実に捉えました。肝心なことは道徳のような主観ではなく、世界、歴史そして客観的に存在する私の救済なのだ。こうして学校の道徳的心情的比重はずっと減少してしまいました。

高校の入試もすみ、解放された気分浸っていると高校から呼び出され面接することになりました。何と内申書の素行のところ1がついていました。隣校の教師をしている父や姉が動いて解ったことで